

第8回～サブカルチャー理論とラベリング理論

前回の復習

テレビ視聴者の現在

マスコミュニケーションの特徴

- ▶ 送り手と受け手の相互モニタリングの不在
送り手の効果か、受け手による解釈か？
- ▶ 強化効果説：マスコミの流す情報は受け手に非常に大きな影響を及ぼす
- ▶ 限定効果説：マスコミの流す情報は受け手にそれほど大きな影響を及ぼすわけではない
- ▶ 能動的受け手：スチュワート・ホルのエンコーディング・デコーディング

テレビ視聴の文化史

見物・鑑賞的テレビ視聴（1950年代～1970年代半ば）

- ▶ 「観客」として送り手からの情報やメッセージを集中して受け取ろうとする（送り手>受け手）

能動的テレビ視聴（1970年代半ば～1980年代半ば）

- ▶ 「観察者」として番組の細部にツッコミをいれながらテレビを見る（送り手<受け手）

相互作用的テレビ視聴（1980年代半ば～1990年代半ば）

- ▶ 「共犯者」として送り手の仕掛けを、仕掛けと分かりながら敢えてノる（送り手⇔受け手）

相互受動的なテレビ視聴（1990年代半ば以降）

- ▶ テレビは全て多かれ少なかれ「ヤラセ」を含んでおり、それゆえテレビの外側の現実をテレビに持ち込むのは野暮だとする心性

内閉化するテレビ空間

- ▶ 「ツッコミ」は、意味を変容させる力ではなく、テレビのなかで生み出されるリアリティへの即座の反応力へと変質した

サブカルチャー理論

「サブカル」と「サブカルチャー」

日本における「サブカル」という言葉

- ▶ 「サブカル」という日本語
 - ▶ 大文字の文化ではなく、娯楽を目的とする文化→狭義の「サブカル」
 - ▶ ヴィレッジバンガード、「Studio Voice」など
 - ▶ マンガ、アニメ、ゲームなどの所謂オタク文化→広義の「サブカル」
 - ▶ 厳密には上記「サブカル」と競合状態にある
- ▶ ただし、サブカルチャーという言葉が元々持っていた社会階層に対する異議申し立てという要素は、日本の「サブカル」では後退

「主流」文化に対する「下位」文化

デイヴィッド・リースマン（1950=1964）『孤独な群集』みすず書房

- ▶ 若者文化：主流社会に反抗する少数派グループ（デイヴィッド・リースマン）

ディック・ヘブディッジ（1979=1986）『サブカルチャー～スタイルの意味するもの』未来社

- ▶ 「サブ（sub-）」＝～の下の、～に従属する／「カルチャー（culture）」＝文化
- ▶ サブカルチャーとは、平たく言えば主流的な文化の下にある「下位文化」のことだが、英米のサブカルチャー理論では、主流社会に抵抗する文化的実践の集まりを指すことが多い
 - ▶ 社会空間には複数の文化がせめぎあっているが、それら複数の文化には、社会階層（富裕層、中間層、貧困層）に呼応するかたちで、社会的立場（影響力）が不公平に割り振られている
 - ▶ サブカルチャーは、従属的な文化集団が、その従属的な立場に異議を唱え、それを「反社会的行為」と決めつける主流社会に抵抗するために生まれる

反抗としてのスタイル

- ▶ 「スタイル」：姿勢、身ごなし、動作、服装、髪型、隠語、音楽などの総体
- ▶ 「スタイル」を形成する理由
 - ▶ 仲間意識、連帯感の共有
 - ▶ 「目立ちたい」という欲望

下からのクリエイティビティ

- ▶ 既存の服、商品、言葉、イメージ、サウンドなどを流用し、読み替える
 - ▶ パンクス：安全ピンの流用・読み替え
 - ▶ ヤンキー・暴走族：「逸脱文化の異種混交」
 - ▶ グラフィティ：街そのものの流用・読み替え
 - ▶ ガングロ・ヤマンバ：ファッションアイテムの過剰な強調
 - ▶ ニコ動などの二次創作……

ラベリング理論（ラベル＝レッテル）

ハワード・S・ベッカー（1963=1993）『新装アウトサイダーズ～ラベリング理論とはなにか』神泉社

文化というものは基本的には一群の人々が共通の問題に直面し、しかも互いに効果的に相互行為とコミュニケーションを行っているかぎり、その共通問題に照応して生ずるものである…中略…このため、逸脱行動にはしる人々が互いに相互行為の機会を持った場合には、彼らは一つの文化を形成する。そしてそれは、自己の行動についての自らの立場と他の社会構成員の立場との相違から発生する問題を巡って形成される文化である。（p.117）

出典：ハワード・S・ベッカー（1993）『新装・アウトサイダーズ～ラベリング理論とはなにか』新泉社

- ▶ シカゴの街でジャズピアニストとして生計を立てつつ、大学で社会学を学ぶ
 - ▶ そのときの体験や他のジャズミュージシャンとの交流を元に、社会的に「のけ者・アウトサイダー」と呼ばれる人びとが、どうしてそう呼ばれるようになるのかについて研究した
 - ▶ 主流文化の決まり事に従わない人も「不良」というラベル（レッテル）をはるのは、不良本人ではなく、それを取り巻く複数の人びとであり、主流文化の力関係のなかでより権力に近い人間（例えば警察官や裁判官）による名指し（ラベリング）が、その力関係のなかで影響力を持つため、客観的なものとして通用してしまう

名乗りと名指し

- ▶ 名前のつき方には、他人に名指される場合と、自分から名乗る場合がある
- ▶ 名乗り（自分が思う自分の姿）と名指し（他人が思う自分の姿）のあいだにはギャップがある。
 - ▶ 名乗りたい自分の属性と、人に名指されるとむかつく属性があると思う

- ▶ おれ、B系のつもりなんだけど、ヤンキー呼ばわりれされてむかつく
- ▶ やおい仲間から腐女子と言われるとうれしいけど、知らない男子から腐女子と言われる傷つく

文化と呼び名

- ▶ ある文化が他の文化と区別され、その境界線が引かれるとき、先ずはその文化を他の文化と区別するための名前が必要になるが、問題なのは、誰が名前を付けるかである。

「日本人」とは誰なのか？

田辺俊介（2008）「『日本人』であるとはいかなることか～ISSP2003調査に見る日本のナショナル・アイデンティティの現在」南田勝也・辻泉（編）『文化社会学の視座』ミネルヴァ書房（pp.287-308）

ナショナリズムの不思議

若者の右傾化は本当か？

- ▶ 国際スポーツイベントでの熱狂
- ▶ 国粋主義的ラップ
- ▶ ネットウヨ（インターネット上で活動する右翼思想者）
- ▶ 反・反捕鯨運動
- ▶ 従軍慰安婦・靖国神社参拝・米軍基地……

なぜ、「日本」に振り回されるのか？

- ▶ 日本代表選手の成績や外国からの批判は、実際にはそれほどあなた自身とは関係のない話
 - ▶ 自分が勝ったわけでも、自分が非難されたわけでもない。にも拘らず……
- ▶ まるで自分のことのようにリアクションをしてしまう。
 - ▶ →端的に言えば、それはあなたが「日本人」だから。
 - ▶ しかし、「日本人」である条件とはなんだろうか？
 - ▶ 日本で生まれたから？ ⇔ 日本人を親に持つから？

ナショナル・アイデンティティとは？

- ▶ 「ナショナル（national）」なものに対して各人が持つ一体感・帰属感（アイデンティティ）
- ▶ ナショナルなるものを底支える国民、国家というものは、政治的な意図から生まれた近代的な制度でしかない→ベネディクト・アンダーソン（1991=1997）『想像の共同体』NTT出版
 - ▶ 産業化によって地縁・血縁的な基礎的つながりから切り離された人々を、言語と文化によって新たに統合するためにネーションが生まれた。
 - ▶ 「国語」を教える義務教育機関が確立し、新聞などのマスメディアの普及により、「国語」を通して理解しあえる「国民」という自己暗示が成立した。

国際社会調査プログラム（ISSP）から

- ▶ ISSP（International Social Survey Program）：国際社会調査プログラム
 - ▶ 国際比較可能な量的データの獲得を狙った調査。2008年の時点で43ヶ国が参加
 - ▶ 今回の分析で使用するデータは、16歳以上の日本国籍者1102名分を使う

日本人の条件

- ▶ 出生地、国籍、居住年数、言語、法や制度の遵守、自己定義、血統の全てが重視されている
- ▶ 宗教だけが、重要と考える人は少数派

日本の誇り

- ▶ 科学技術や芸術、スポーツなどの文化的な分野で回答者の8割以上が誇りを感じている
- ▶ 歴史、経済発展、民主主義なども過半数が誇りを感じている

- ▶ 世界影響、社会保障、軍事力などは比較的評価が引く

日本人の排外意識

- ▶ 不法滞在取締りや犯罪率上昇で、排外的意見が多い→外国人流入は「治安問題」として捉えられている
- ▶ 職を奪う、公的援助の過剰について、排外的意見は少ない→外国人流入は「雇用問題」あるいは「失業問題」としては捉えられていない

「若者の右傾化」は本当か？

日本のナショナル・アイデンティティの4つの類型

- ▶ クラスタ分析
 - ▶ 上に見た①「日本人の条件」、②「文化的プライド」、③「政治的プライド」、④「排外性」の4要素について、クラスタ分析を行った
 - ▶ 「似ているもの同士をまとめるための探索的なデータ解析の統計手法」（教科書p.306-7）を行った
- ▶ 反国家主義的ナショナル・アイデンティティ（第一クラスター）：①、③、④が低く、②が平均より高い
 - ▶ 文化的側面には誇りを感じているものの、非排外的なナショナル・アイデンティティを持つ。
 - ▶ 平均年齢、三〇歳未満比率が最も高い
 - ▶ 学歴も大卒比率も最も高い
 - ▶ 自民党支持者は10%程度
- ▶ 国粋主義的ナショナル・アイデンティティ（第二クラスター）：①、②、③、④全てが高い
 - ▶ 日本に誇りを持ち、日本人を認める敷居が高く、排外意識が強い
 - ▶ 平均年齢が最も高い
 - ▶ 学歴は低く、大卒比率も低い
 - ▶ 自民党支持率は最も高い
- ▶ 排外主義的ナショナル・アイデンティティ（第三クラスター）：①、④は高く、②、③は比較的低い
 - ▶ 日本人を認める敷居が高く、排外意識も強いが、日本についてのプライドはそれほど高くない
 - ▶ 平均年齢が高い
 - ▶ 学歴は低く、大卒比率も低い
 - ▶ 自民党支持率は低い（国に誇りを感じられないのはこの辺りが理由か？）
- ▶ 文化主義的ナショナル・アイデンティティ（第四クラスター）：①、②、④は低く、③は高い
 - ▶ 文化的には愛国心が高いが、特に排外的ではない
 - ▶ 平均年齢が低く、三〇歳未満比率も高い
 - ▶ 学歴は高く、大卒比率も高い
 - ▶ 自民党支持率は比較的高い

この分析から分かること

- ▶ 「右傾化」しているのは若者ではない
- ▶ 排外主義者あるいは国粋主義的な考え方をしている日本人は、圧倒的に高年齢層に多い。
- ▶ 特に排外的ではない若者（文化主義的ナショナル・アイデンティティを持つ若者）を、「国粋主義的」、あるいは「排外主義的」と勘違いしている可能性がある
- ▶ もちろん、排外的・国粋主義的な若者もいるが、その比率は比較的少なく、若者全般に当て嵌めることは出来ない

授業資料は下記URLに置いてマス。更新は不定期なので、気長におネガイします。
<http://www.djmagimix.org/archives/category/pedagogie>